

【聖書箇所】

27 その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。28 彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。29 そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席についていた。30 ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。

「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」31 イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

33 人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。

しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています。」34 そこで、イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。35 しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」36 そして、イエスはたとえを話された。「誰も、新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎをあてたりはしない。そんなことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服からとった継ぎキレも古いものには合わないだろう。37 また、だれも、新しいぶどう酒を振るい革袋にいれたりしない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は革袋を破って流れ出し、革袋もだめになる。38 新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れなければならない。39 また、古いぶどう酒を飲めば、誰も新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである。」

1 人間の新しい

先週の金曜日以来、オウム真理教の事件が大きく報じられています。新聞、テレビ、ネットでもオウム真理教についての記事が溢れていました。いくつかの記事を読んで、ある言葉を思い出しました。アンナ・ハーレントというユダヤ人の哲学者が言った言葉です。「悪は凡庸だ」。彼女は、この言葉を、ナチスの高官アイヒマンの全ての裁判を傍聴して書いた本の中で語りました。「アイヒマンは極悪人なのではない、ごく普通のとるに足りない小心者の役人であった。ただ彼には思想というものが全くない、それが彼を稀代の悪人とした。」

アンナ・ハーレントは哲学者ですから、「アイヒマンには思想がない」と語りました。神学者であれば、「アイヒマンは神を知らなかった」と語るでしょう。神を

知らなかった、だから、ヒトラーに洗脳されるがままに組織の歯車としてホロコーストを推進できた…と。アンナ・ハーレントは、それは人類が昔から繰り返してきた事だ、なんの新しさもない…として、「悪は凡庸だ」と言ったのです。

私もまた、オウム真理教の記事を読んで、「オウム事件にあるのは、聖書に書いてる人間の悪だ。人間は3000年間、同じ悪を繰り返しているのだ」と思いました。オウム真理教の教祖も、彼に感化され洗脳された幹部達も、自分達を神として、自分達と違う者達、都合の悪い者達を排除しようとしたのです。そして、自分達を神としたい思い、自分達だけが正しいのだ…という思いは、私達のそれぞれの心の中にある思いではないかと考えます。それは古代世界から何も変わらない。しかし、そんな私達を変える為に、イエス・キリストはこの世へと来られたのです。

2 レビの家のパーティー

さて、私達の手元にある新共同訳聖書では、先ほど読んで頂いた聖書箇所は、二つの段落に分けてあります。そして、最初の段落に「レビを弟子にする」という見出しがつき、後ろの段落には「断食についての問答」という見出しがついています。ですから、私達は、レビが主イエスの弟子となり、自宅で饗宴を開いた話と、断食についての問答を別々の時に起こったことのように考えてしまいます。しかし、よく注意して読むと、ルカは断食問答は、レビの家のパーティーの席で起こっていた事として描いている事がわかります。

レビの開いたパーティーには三つのグループの人々がいました。一つはイエス様とその弟子たち。そして二つ目は徴税人と彼らの知り合い、三つ目はファリサイ派達です。33節で主イエスに物申した「人々」とはファリサイ派の人々です。

3 徴税人

当時のイスラエルはローマ帝国の植民地。レビは徴税人。ローマ帝国や領主から委託されて税金の徴収を行う仕事をしていました。税金だけ徴収するのではなくて、自分達の手数料分上乗せして取り立てていたので、お金持ちでしたが、一般庶民からは嫌われていました。嫌われている理由はそれだけではありません。当時のイスラエルの人々は、神を知らぬ民、外国人は汚れているから付き合ってはならない…という決まり一律法がありました。律法によればローマ人とも付き合ってははいけません。しかし、徴税人はローマ人と付き合わなければ仕事にならない。従って、徴税人は、ユダヤ教の会堂で行われる礼拝にも出る事ができなかったのです。お金持ちだけど町のつまはじき者、それが徴税人でした。

4 ファリサイ派

一方、ファリサイ派の人々は徴税人たちとは正反対です。非常に信仰に熱心な人々で、律法をきちんと守る事に情熱を傾けていました。どれだけ熱心かという、命をかけるほどに熱心でした。イエスさまの時代の200年ほど前、当時のイスラエルはシリアという強国に支配されていましたが、イスラエルの人々は、独立を目指して武装蜂起しました。相手は大きくて強い国でしたが、イスラエルの人々はゲリラ戦法で立ち向かい善戦します。しかし、どんなに戦いが激しかろうとも、彼らは安息日には武器を取りませんでした。「安息日に働いてはならない」という戒律を守るためです。敵が安息日を狙って攻撃を仕掛ける事も重々分かっていたはずです。それでも彼らは戒律を守って応戦しなかったのです。結局、安息日には多くの人々が殺されました。この戦いを戦った人々の末裔がファリサイ派の人々だと言われています。

自分達こそ、神の掟を守っている正しい人間だ…という自負心、プライドの強い人々でありました。真面目で敬虔な人々。お金持ちは少なく、却って貧乏な人が多かったようです。手に職を持ちながら、真面目に働きつつ、敬虔な生活を守っていたのです。いわば、優等生です。

自分達のお金儲けの為に不当な額の税金を取り立て、戒律を破る徴税人たち、一方、貧しいながらも敬虔にまじめに戒律を守る事を第一に過ごす、でも、そうできない人々の事を軽蔑して遠ざけるファリサイ派の人々。現代でいえば、社会のアウトローと、超真面目な堅物人間。なんの共通点もない、まるで水と油のような人々です。

5 悔い改め

ファリサイ派の人々は主イエスの弟子たちに、「あなた達の先生は、どうしてあんな罪人たちと一緒に食事をするのか」と尋ねます。ファリサイ派の言う“罪人”とは犯罪を犯した人ではありません。神の戒律を守らない人々の事です。主イエスはファリサイ派の人々の問いかけに、当時みんなが知っていた「医者が必要なのは健康な人ではなくて病人だ」という格言を用いて答えます。「私は正しい人ではなく、罪人を招いて悔い改めさせる為に来た」31節です。

悔い改めとは、単なる後悔とか反省とは違います。父なる神の方へと方向転換すること、父なる神のもとに立ち帰ることを言います。神さまから離れて生きていた人々、神さまを知らずに生きて来た人々が神さまのもとへと方向転換するのです。主イエスの言葉はなんと慰め深い言葉でしょうか。父なる神を信じられない者を裁くのではない、父なる神の決まりを守れない者を裁いて、追い出すのではない、父なる神のもとに戻れるように、イエス様はご自身の近くに罪人を呼び寄せるのだ、そしてイエス様ご自身が父なる神の方へとその人の向きを変えてくださる…というのですから。

しかし、ファリサイ派の人々は納得できません。「我々も洗礼者ヨハネの弟子たちも断食して祈っている。あなたの弟子たちは断食していないじゃないか？」と続けて主イエスに問いかけます。

6 断食

ここで少し、断食について説明したいと思います。断食とは、何か重大な罪を犯した時に神に赦してもらう為や神に大きな願い事をする時に、食べ物を断つ事を言いました。食べ物も喉を通らないほどに、自分の犯した罪の大きさに悲しんでいる、その事を神に分かっていただきたい…との熱情を神に示すためでした。私達も本当に「自分はなんという事をしてしまったんだ」と気づいた時、食べ物も喉を通らない事があります。

罪の悔い改めの為の断食が頻繁に行われるようになったのは、先ほどの交読詩編126篇の所で説明したバビロン捕囚の頃でした。自分達の罪の為に国が滅びた、それを悲しんで断食して、神さまの御前に自分達の罪を悲しみ、悔い改めの証としたのです。

最初は、自分達の罪深さを自覚し神さまに赦してもらう為の断食でした。ですが、人間というのは、愚かな者です。いつの間にか手段と目的をはき違えました。手段が目的になります。真実に悔い改め神に赦してもらう事ではなくて、断食したいが目的になったのです。何故か？それがいかにも信仰深く見えるから。自分もそれで神と近い関係になったつもりになれるし、皆もそう評価してくれる。いつのころか、断食する事が目的となり、主イエスの時代には、真面目なファリサイ派の人々は、一週間に二日、月曜日と木曜日に断食をしたそうです。彼らにとって、悔い改めとは断食でした。

つまり、ファリサイ派の人々は、主イエスに質問を続けているのです。「あなたは悔改めに導く…というが、悔い改めているのなら断食するものだろう。現にあなたの弟子たちは悔改めなんてしてないじゃないか、我々のように断食していないじゃないか。飲んだり食ったりだ」と。

7 ファリサイ派の考える悔い改め

ファリサイ派の考える悔い改めとは、悲しみの表現でした。自分の罪を嘆き悲しむ事でした。しかし、それはファリサイ派だけではありません。私達もまたそういう風に考えてしまう、受け取ってしまう所があります。何故なら、悔い改めとは自分の罪過ちを認める事。だから、悲しむ事をしないと神に許されないと考えてしまうからでしょう。

私には悔い改めについての失敗談があります。前任地の北九州で、九州北地区の女性会の研修会で悔い改めをテーマに説教をした事があります。その後にグループ毎に分かれて悔い改めについて経験談を話し合ったのですが、各グループとも、反省大会になりました。例えば、遅刻しそうな出勤途

中でうずくまっている人を見かけたが、自分は声をかけなかった、自分はキリスト者として愛が少なかった、情けない…と反省する。しかし、そこで終わるのです。反省して悲しむだけです。私はその件以来、私の説教に何が欠けていたのだろうか…とずっと考えていました。そして、ルカの福音書の5章を改めて読み返して、「そうか、悔い改めとは、キリストと再び出会う事なのだ。悔い改めは喜びを生む。その事をはっきりと伝えることができていなかった」と気づかされました。

8 イエスの悔い改め

「悔い改めは、神の御前に反省し悲しむ事だ」と思い込んでいるファリサイ派の人々、そして私達に対して、主イエスは仰るのです「神の御前に断食して、反省し悲しむ態度を見せるのは、私が来るまでの古い悔い改めだ」と。それが「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。」という言葉です。当時の結婚式は非常に盛大で、一週間も飲んだり食べたりして人々は喜び祝ったそうです。ここで花婿とは主イエスの事です。イエスさまは、この部分以外でもご自身を花婿に喩えておられます。花嫁は、イエス様を信じる人々の集まり、教会です。イエス様は教会と結婚してくださる…というのです。喜びの花婿、当時の人々の一生において最も特別な喜びの時、婚宴に喩えて、主イエスは悔改めを語るのです。悔い改めはまさしくそのような喜びの時なのだと。それは当時にはない、全く新しい悔い改めでありました。主イエスが来られた事によって悔い改めの意味が全く変わったのです。いえ、悔い改めの本質がはっきりと表れた…と言えるかもしれません。

どういう事かというと、私達を受け止めてくださる花婿、主イエスがいらっしゃるという事です。私達の罪をご自分の罪として受け止めてくださり、ご自分の清さを私達に与えて下さる、花婿、主イエスがいるという事。私達は悔改める度に、その事に気づかされる、そこに大きな喜びがそこにある…というのです。私達一人一人の罪咎を自分の罪として受け止め、神に償ってくださる方イエス・キリスト。このお方の新しさ、ご自身の新しさを主イエスは、新しい衣服と古い衣服、新しい葡萄酒と古い葡萄酒、新しい革袋と古い革袋の譬えを用いて話すのでした。このたとえ話は、当時、「新しいものと古いものを混ぜ合わせてもうまくいかない」譬えとして使われていたもののようです。主イエスは誰もが知っているたとえを通じて、ご自身の新しさを伝え、「なぜ断食しないのか」と形式的な所に留まっているファリサイ派の人々の問いかけの持つ問題点を指摘したのです。

9 放蕩息子の譬え話

ルカ福音書5章を繰り返し読み、主イエスが来られて新しくなった悔い改めについて考える時、私はいつも放蕩息子のたとえ話を思い出します。大金持ちの父親と二人の息子がいました。次男は、父親の財産の生前分与を要求し財産を受け取ると父のもとをさっさと離れ、外国で放蕩三昧の好き勝手な暮らしをします。ですが、そんな生活は長く続きません。お金を使い尽くすと、それまでちやほやしていた人達も手のひらを返したように冷たくなります。とうとう食い詰めてしまった次男。飢えてしまって、豚の餌を食べてでも生き延びたいとあさましく落ちぶれ果てた彼。実家の豊かな生活を思い出し、父親に謝ってなんとかして家に戻してもらおうと決心します。そして遠い外国から父親の家へと戻ります。

しかし、この次男坊が思いもかけぬ事がありました。父親は息子が家を出ていった時からずっと、今日帰って来るか、明日帰って来るか…と遠くが見渡せる丘の上で弟息子を待ち続けていたのです。遠くに弟息子の姿を見つけた父親はかけよって行ってボロボロに薄汚れた息子をがっしりと抱き寄せ、「よく帰ってきた、この日をずっと待っていた」と心から喜ぶのです。放蕩息子が思ってもみない父の愛でした。

その父親の胸の中に抱きしめられて、放蕩息子は初めて自分の罪を悟ります。そして心の底から「父さん、私は神にも父さんにも罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」と自分の罪を告白するのです。

悲しいふりをしているのではない、心から「ああ、父さんの気持ちも知らずに自分はなんと悪い事をしてしまったんだ」と自分の罪を心から悔い改めるのです。どうして、そんな事ができたのか？それは、父親に堅く抱きしめられたからではないでしょうか。食料が欲しくて帰って来た、安心して寝る場所が欲しくて帰って来た、欲得ずくで帰って来た自分にも拘わらず、父親の胸は大きくて暖く自分を包んでくれた。自分を受け止めてくれる神の愛の中でこそ、私達は自分の罪を悔い改める事ができると分かります。喜びをもって。主イエスの仰る悔い改めはそういうものなのです。

罪を悟る事、悲しむこと、罪を憎む事、大切な事です。それが悪いと言っているのではない。しかし、それだけでは何も変わらない、悔い改めではない。自分の罪を受け止め、赦す方の愛を知る事こそ、悔い改めです。それは、敵の為にも命を捨てる愛です。徹底的な神の愛。これを知り、味わい、喜ぶ事、自分自身の正義にがんじがらめになるのではなくて、神の愛に解き放たれる事こそ、まことの悔い改めです。

10 ルーチン化

悔い改めは神の深い深い愛を私達に悟らせ、大きな喜びをもたらす…ファリサイ派の人々は、主イエスが示すこの喜びを知らずに、悔い改めを儀式化しました、習慣化しました。断食して祈っていれば悔い改めになる…と考える

ようになったのです。曜日を決めて断食し反省を含めた祈りをした、それで罪がきよめられ、自分達は清い人間だ、信仰深い者だと傲慢になってしまいました。まるで、神さまの赦しを、自動販売機で売っているジュースにしてしまっているようです。お金をいれてボタンを押すと出て来るジュースのように。断食して祈れば罪の赦し、自分の清さが手に入ると。

しかし、これは私達にも言える事です。私達の中にも、「〇〇しとけばいい」という思いがわいてくるからです。その方が安心するのです。自分達のやって来たやり方にこだわる、その方法を手放さない…という事を私達は度々行います。それが39節で主イエスの仰っている事です。「古い葡萄酒を飲めば、誰もあたらしものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである。」

それはそうです。〇〇しとけば恵みが与えられる…ならその方が安心です。しかし、私達はそうする事によって神さまから遠く離れて行っている事に気づかねばなりません。そしてやがては神の御子を、私達をこよなく愛して下さる方を、十字架に架けて殺してしまうのです。

私達人間は、ファリサイ派にもなれば、徴税人にもなる。そんな存在です。ファリサイ派である事が人間の本質ではない、徴税人である事が人間の本質ではない。神を見失っている…という事が人間の本質だからです。ですから、この神と出会わない限り、新しく出会い続けられない限り、自力では古い自分を変える事はできません。

11 結び

ですが、絶望する必要はありません。主イエスが私達の間におられるからです。確かに花婿であるイエス・キリストは一旦、弟子たちから奪い去られました。しかし、聖霊として、見えない形で弟子たちに与えられ、私達の間にも来てくださっています。それは、私達人間にはない新しさが、私達が自力で獲得できない新しさが私達に与えられたという事に他なりません。主イエスは、共にいてくださり、私達が徴税人になりそうな時—神も御許から離れて、自分の欲望にあかせて自己中心的に好き勝手にしようとしている時、「私はあなたの為に十字架にかかった」とその愛を見せてくださいます。十字架のもとへと招いてくださる。

私達がファリサイ派となり、自分の信仰を頼みに、他の人々を裁くような事を始める時、やはり十字架と復活の主イエスが「私はあなたの為に十字架にかかった。そうしてあなたの罪を赦した。あなたは罪赦された者ではないのか。どうして人を裁くのか」と諭してくださいます。そして共に喜びの宴へと招いてくださるのです。あの放蕩息子のたとえ話の父親が、真面目な兄も、放蕩三昧の息子も、喜びの宴に招いたように。

この主イエスとの交わりを喜び楽しむ事で、私達は、日々変えられていきます。イエス・キリストは、日々の生活の中で私達がそれぞれの場所で様々に喜び、怒り、悲しみ、楽しむところ、生活の現場で出会ってくださいます。私達をご自身のもとへと招いてくださいます。今週も主イエスとの出会いと交わりを通じて、新たにされていきたい…と切に思います。そして、まだキリストを知らない方々にこの方がもたらす新しい喜びを伝えて行きたいと願います。